

門弟2 「ぜんそくで、時々咳き込んで疲れたご様子だ。」

門弟1 「了佐のために教書を書いておられるようだ。」

門弟2 「あまり、無理をされないようにと、申し上げよう。」

⑩ 門弟たちは、先生の部屋をたずねました。

門弟1 「先生、このごろ夜中まで仕事をしておられるのは、了佐のために教書を書いておられるからですか。」

門弟2 「了佐を教えるだけでも時間がかかるのに、その上、教書を書かれるのは大変です。お体は大丈夫ですか。」



門弟1 「それに、私たちの講義の時間が減りました。」

先生 「言いたいことは、分かった。ま

ず了佐のことだが、お前さんたちに比べると、学問を身につける力が弱い。しかし、やりとげようとという根気は、人の何倍もあり必死にがんばっている。そんな了佐が一人前の医者になれるよう、できるだけのことをしてやりたい。次に、お前さんたちのことだ。さむらいとして選ばれて学問を習いに来ているものが多い。私が少し教えればすぐに理解できる。お互いに学び合うことも大切だ。工夫し

て学問を深めなさい。」

門弟1 「先生、よく分かりました。あれこれ行つたことをお許しく

さい。」

先生の言葉は、門弟たちの心に響きました。先生は心の底から、みんなのことを考えておられることや、心に決めたことは、必ずやり遂げる人だと分かりました。

⑪ 了佐が小川村で勉強を始めてから三年あまりが過ぎました。今では、先生から教書をもらうと、自分の力で読みこなし、理解ができるようになっていきました。了



佐は、今日も先生から教書をいただく日です。

先生 「了佐、来なさい。さつそくだが話をしたい。この教書がお前さんに渡す最後のものだ。今日からしばらくかかると思うが、しっかりと勉強を仕上げなさい。」

了佐 「先生、『この教書が最後』というのは、どういうことでしょうか。」

先生はやさしい笑顔で答えました。先生 「いよいよこれで、了佐が一人前の医者になる力が付くということだよ。」

了佐 「先生、本当ですか。この私にそんな力が付いてきたのですか。」
了佐は思わず、先生の前で泣き伏

しました。学問が苦手な了佐でしたが、とうとう、その努力で医者としての力を付けてきたのです。

先生が了佐に書いた医学書（捷徑医筈）は、四〇〇字詰め原稿用紙にして千枚にもなるものでした。

⑫ いよいよ、了佐が大洲へ帰る日になりました。喜びに輝く晴れやかな旅姿で先生の所へやって来ました。

了佐 「先生、長い間お世話になりました。私はうれしくて、うれしくてたまりません。」



先生 「了佐はよくがんばった。うれしい気持ちには、わたしも同じだよ。大洲に戻っても、学んだことを忘れないよう勉強を続けなさい。そして、心のやさしい医者になりなさい。」

了佐 「はい、先生のお言葉を忘れません。先生、どうかお体を大切になさってください。」

こうして了佐は、喜び勇んで旅立ちました。了佐が大洲で医者を志し、先生から医学の手ほどきを受けた日から、実に九年の年月がたったのです。了佐が帰ってから、先生と一緒に見送った門弟たちに言いました。

先生 「私は、了佐の教育に力の限りを尽くした。しかし、かんじんの

了佐にがんばる気がなかったら、とても一人前の医者にはなれなかったであろう。お前さんたちは、たくさん才能をもっている。やろうという気があれば、どんなことでもできるはずだ。」

門弟たちは自然に頭が下がる思いで、先生の言葉を聞きました。

⑬ 了佐は医者としての志をもって、ふるさと大洲へもどって来ました。

了佐 「父上、ただいまもどりました。先生にみっちり教えていただき、医者のお力を付けてもどれました。先生のおかげです。私のために教書を書いて、教えてくださいました。」

父 「医者になれたことを信じてよいのか。お前は何という幸せ者だ。」

了佐 「私は、先生のような心の温かい医者になりたいと思います。」



父 「先生のご苦心に報いるには、それが一番じゃ。」

大野了佐は、間もなく母の実家『尾関家』で『尾関友

庵』と名乗る医者になり、七十七歳まで、真心をもって治療する先生と慕われて、生涯を医者として活躍したのです。

また、自分のおいを医者にするため、熱心に教育して立派な医者に育て上げました。（おしまい）